

面白い話がある。松浦のわた

しの後援会長である県議会議員の友田吉泰氏が研修旅行で隠岐の島へ行ったらしい。観光案内をするバスガイドに「岡部耕大を知っていますか」と質問すると、バスガイドは「はい、わたしの親戚になります」と言ったそう

だ。なぜ、バスガイドがわたしの名前を知っていたのか、思い当たる節はある。

もう、かれこれ5、6年前、わたしは隠岐の島から呼ばれて

「隠岐騒動」の講話をしたことがある。わたしが舞台劇「隠岐騒動」を書くことを知った隠岐の

関係者が呼んでくれたのである。講話の会場が満席なのには驚いた。それより驚いたのは、講話を聴く一人一人がノートと鉛筆を準備していたことである。

も評判が良くて安堵した。隠岐の島とは演劇を通じて、いまもつながっている。わたしと親戚だと言ったバスガイドもそれ

をつながったのかもしれない。友田さんもこの因縁には感動したようである。演劇の力である。神奈川の猫の額のようなわがこの人に拾われた花びらは果報

歴史紡ぐ3本の木

わたしの言葉のひとつひとつをメモしている。昔、隠岐の島には政治犯が流されたと聞いてはいたが納得した。だれもが勉強熱心なのである。「隠岐騒動」

に關してもわたしよりも詳しい人はかりのほずである。4年前に

「隠岐騒動」の島で上演した「隠岐騒動」

うに咲く。劇団員を呼んで花見

家の庭には3本の木が茂っている。1本は娘の民子の誕生日に植えた桜である。もう、43年にな

る。8重桜である。お花見が過ぎた頃に咲く。ひらひらと散る八

重桜には風情がある。4月8日

で買ひ、酒のつまみにした枇

者である。玄関の横には紅葉が植わっている。植木市で買ひ求めた苗木であったが、いまは道

路を隔てた向こうまで届く大木

になった。もう1本は枇杷の木

である。これはわたしがスーパ

若い頃は四季の移ろいなどは感じたことはなかった。いつも演劇や本を書くことで頭がいっぱいであった。酔っぱらって歩いて

いる人を見て「ああ、花見か」と春を感じ、蟬の声と流れる汗に夏を感じただけである。

原稿用紙に鉛筆で脚本を書いた。座り机と稽古場の演出席の座布団がわたしの居場所であった。新作を書き、また新作を書く。その繰り返しであった。しかし、八重桜も枇杷の木も紅葉も、確実に育っていたのである。70歳を過ぎた今、それらを見上げて老いを知る。

(松浦市出身)